

六朝文学研究への新たなアプローチ

陳 翀

孫明君著

西晋士族文学研究

中華書局 二〇一〇年

〔四、一六六頁〕

本書の著者孫明君氏は、ご存知の方も

多いだろうが、中国の魏晋六朝分野の研究を牽引するトップ研究者の一人である。名門大学の清華大学中文系に教鞭を取る氏は、中国古典文学研究の大家である陝西師範大学の霍松林、北京大学の陳貽焮両教授の親伝を承け、その研究業績によって三十七歳という若さで教授に抜擢されたことで、中国の学界を驚かせた。また、二〇〇七年、九州大学文学部中国文学研究室の外国人教師に招かれて、日本でも精力的な研究活動を行い、日本の中国古典文学研究界にも強い印象を残した。

本書は、直接的には、氏が承けた中国の国家社会科学研究プロジェクト「西晋歴史と文学との関係に関する研究」によ

り生まれた研究成果である。しかしながら、二〇〇四年から二〇〇九年までの五年という歳月を費やして生まれたこの重厚な一冊は、氏のこれまでの研究の集大成でありながら、氏の中古文学への新たなアプローチを示したものとしてみるこ

とができる。
「概論編」・「分論編」・「附論編」という三編に大きく分けられた本書は、併せて十六編の論文が収録されている。具体的な章節は以下の通りである。

概論編

- 第一章 士族及西晋士族
- 第二章 西晋士族文学研究綜述
- 第三章 西晋士族文学之特徵
- 第四章 西晋士族文学之嬗変

分論編

- 第五章 「莊老告退而山水方滋」析論
- 第六章 陸機『文賦』与士族文学創作論
- 第七章 陸機与士族樂府之範型
- 第八章 二陸贈答詩中的東南士族
- 第九章 蘭亭雅集前後的会稽士族
附 有関「蘭亭序文」真偽争辯之述評
- 第十章 謝靈運の莊園山水詩
- 第十一章 謝靈運「擬魏太子鄴中集詩」研究
附 謝靈運「擬魏太子鄴中集詩」作年考

中国年鑑 2011

◎好評発売中◎

中国研究所 編・発行

毎日新聞社 発売

1955年創刊。現代中国に関するあらゆる分野の最新情報、基本情報を提供。

B5判 498頁

価格：18,900円(税込)

◆特集

波立つ海洋・動き出す内陸

建国から60年が過ぎた中国が大国として求められる、内外で抱えるさまざまな課題を取り上げた論考を掲載。

◆動向

政治、外交、経済、対外経済、文化、社会

◆要覧・統計

国土と自然、人口、国のしくみ、軍事、少数民族、華僑・華人、香港、マカオ、台湾、国民経済・国民生活、財政、金融、証券・保険、農業、工業、資源・エネルギー、交通運輸、対外経済、知的財産権、労働、暮らし、社会保障・医療制度、環境問題、NGO・NPO、教育、文化、宗教

◆資料

統計公報、重要文献、主要人事、2010年日誌ほか

※お問い合わせは中国研究所事務局まで。

一般社団法人 **中国研究所**

〒112-0012

東京都文京区大塚 6-22-18

TEL: 03-3947-8029

FAX: 03-3947-8039

e-mail: c-chuken@tcn-catv.ne.jp

URL: http://www.soc.nii.ac.jp/ica/

附論篇

第十二章 謝朓「拜中軍記室辭隨王箋」

釈証

第十三章 庾信詩賦中の士族意識

附 庾信「哀江南賦」作年

辨証

第十四章 陳寅恪士族理論述評

第十五章 黄節与漢魏六朝詩歌之箋注

第十六章 日本文學者六朝詩歌研究一瞥

氏は、「前言」において、本研究によってうかがえた両晋士族文学の内実を、項目に分けて丁寧な概括している。以下、簡潔に氏の観点を纏め、その研究成果の一端を紹介する。

(1) 「士族」とは、正史に言及された

名門の出身、父祖は公卿大夫、本人は高き文化教養を有しているという三基準以外にも、本人の交遊・他の士族との一体感・作品に溢れる士族の優越感なども、重要な判断基準となっている。

(2) 「士族意識」とは、作品に反映された当の作家の家格に対する強烈な自負と鮮明な貴族趣味。

(3) 「士族文学」とは、士族たちによって創作された文学作品であり、強い士族意識の反映・芸術の新奇性の追求・文学サロンにおける共通的な創作傾向という三つの特徴がうかがえる。

(4) 両晋士族文学の変遷は、概ね

中原士族と東南士族との併存(西晋時期)・会稽士族(東晋時期)・謝氏家族(東晋末劉宋初期)という三階段を経た。

(5) 「莊老」と「山水」は、東晋士族文学の二つの重要なテーマであり、両者の本質は一致しているが、その底流には、いずれも士族意識が色濃く潜んでいる。

(6) 陸機「文賦」の核心には、その家学である儒家の詩学思想が充満している。この「雅而艶」という文学思想は、六朝士族文学の濫觴ともなった。

(7) 魏晋楽府は概ね以下の三類型に分かれる。一つは天下を憂患する曹操型の英雄楽府、一つは個人の悩みを歌う曹丕・曹植型の文士楽府、一つは貴族意識

を誇示する陸機、謝靈運型の士族楽府。

(8) 魏晉の贈答詩は、リアルにその時代の文人交遊を反映している。史料としての価値を認めるべきである。

(9) 「蘭亭序文」は、王羲之の真作であり、王氏一族をはじめとする会稽士族を研究する絶好の史料である。

(10) 謝靈運の山水詩は、莊園山水詩と遊覧山水詩との二タイプがある。その莊園山水詩は、時の士族の美的な趣味を最も反映している。また、「擬魏太子鄴中集詩」などの謝靈運の擬作詩は、自己の一族における繁栄に対する追憶であり、現実逃避のユートピアでもある。

(11) 謝朓の代表作の一つである「暉中軍記室薛隨王箋」は、謝朓が、王子隆集団と決別し、蕭鸞集団に傾くという思想転換を反映するものである。

(12) 庾信の後期の文学作品に、二つの矛盾する思想が錯綜している。一つは故国に対する思念と北朝に対する賛美との矛盾、もう一つは隱居と出仕との矛盾。また、彼の代表作である「哀江南賦」は、

北周明帝初年から明帝武成二年の間の作であると思われる。

(13) 陳寅恪の士族階級理論は、人民階級理論と異なっており、氏が独自に構築した理論である。陳氏の理論は、六朝士族研究に対して指導的な意義を有している。一方、歴史における士族が果たした役割を過大評価した一面も存在している。その理論と研究成果を、より客観的な角度から批判的に継承しなければならぬ。

(14) 黄節の「取材宏博、態度謹嚴(史料を博蒐し、嚴肅に研究を進める)」という研究方法は、今後の古代文学研究にとって、依然として重要な指導的意義を有している。

(15) 世界範囲の中国古典文学研究者は、概ね三分できる。一つは中国本土の学者。一つは西洋の学者。一つは旧漢字文化圏に所属している国及び地域の学者。とくに日本の学術思想は、中国に遜色ない研究実績を蓄積している。

このように、作品の系年考証から時代

■第2回国際シンポジウム

「中国語言文化研究の新展開」

▼11月12日(土)9時～18時▼大東文化会館ホール(予定「プログラムより」漢訳「万国公報」の法律用語が日中両国に与えた影響(藤本健一)／様態補語の考え方と日本語訳について(竹島毅)／語幹となる「可」の意味分析について(大島吉郎)／日中の商人(近世)思想の比較(劉金才)／方言接触与杭州語的形成(游汝傑)／台湾華語共学的现状(姚荣松)／作為第二語言の漢語共学中的文化教学原則(孟柱億)▼主催…大東文化大学院外国語学研究所中国語言文化学専攻▼お問い合わせ…高橋弥守彦 3441748402@johome.nip

■中国社会文化学会 2011年度12月例会

(共催…科研費基盤研究B「世紀交替期中国の文化転形に関する言説分析的研究」)

▼12月17日(土)午後2時～5時▼東京大学駒場キャンパス18号館ホール1F

【講演】汪暉「中国の直面する問題——国家と民主の概念を再考する」

【連携講演】柄谷行人「世界史の構造」における中国

▼公開／無料／通訳あり▼連絡先…東京大学東洋文化研究所・尾崎文昭(ozaki@cc.u-tokyo.ac.jp)＊会場は変更の場合があります。参加希望の方はメールでご連絡ください。

の本質を突き止めることまで、孫氏は、本書において、如何にも多彩かつ精緻な研究方法を我々に提示している。しかし、忘れてならないのは、たとえ中国近代学者の論評にしても、たとえ世界における中国古典文学研究の総括にしても、氏の研究は、終始一つの基本的な視点によって貫かれていることである。つまり、文学・哲学・史学という研究分野の垣根を越え、とくに一次文献資料の積み上げを重視し、時代の流れという大きな視点から両晋士族の文学思想に批判的な研究を行う。この研究方法こそ、本書の神髄であり、氏の五年間という長い研究期間を経て構築された中古文学研究への新たなアプローチであろう。

輝く銀河を仰視するように、筆者は、本書を読むたびにその研究の美しさにこころをうたれる。とくに氏の陳寅恪の学術思想に対する分析は、宋代以前の文学を専門とする筆者に、大きな啓発を与えてくださった。

また、氏が提示した文・史・哲の垣根を

打ち破るといふ研究方法は、無限の可能性の広がりを私たちに示している。たとえば、氏による「蘭亭の序」は王羲之の真作であるという確認に基づけば、文学研究という呪縛から脱却して、「簡紙交代（書写器具である竹簡から紙への完全移行）」という時代の流れの中で、会稽の王氏一族によって組織されたこの蘭亭の集まりは、そもそも文学的な集まりであつたのみならず、紙における通行の書写体を決めるといふ歴史的大会であつたという見方もできるのではないか。王羲之が「蘭亭の序」を書写した主旨は、そもそも文章の文学性よりも、自らが創出した書写体を天下の範とするための計画であろう。一美文を世に送ることよりも、天下通用の書写体を決定することこそ、明らかに重要であり、時の王氏一族における文化的な覇権地位を固める絶好の機会であろう。

蛇足の議論になってしまったが、とにかく筆者自身、本書によって多くの啓発を得た。

より多くの学者に本書の素晴らしさを知って頂くため、蛮勇を奮つてこの書評を執筆した次第である。氏が本書において提示した六朝文学研究の新たなアプローチは、これからの中国古典研究の基本的な指針になることを、筆者はこの書評を書きながら、改めて確信するに至つたのである。

（ちん・ちゅう 九州大学大学院人文科学院・専門研究員）

■第24回新道文庫講演会 古写経の世界

——文字・料紙・装飾を見る——

▼11月4日(金)14時45分～16時15分▼慶應義塾大学三田キャンパス北館ホール(東京都港区三田二一五一～四五) / <http://www.keio.ac.jp/access/mitahall/> 入場無料・予約不要▼講師・赤尾栄慶(京都国立博物館上席研究員)▼主催・慶應義塾大学附属研究所新道文庫(☎03・544271582 / <http://www.sido.keio.ac.jp/index.php>)

【併催・センチュリー文化財回寄託品展覧会 日本写経】▼11月1日(火)～11月17日(木) 17時～21時*土日祝休館慶應義塾大学アート・スペース(南別館1階)▼入場無料・事前申込み不要▼主催・慶應義塾大学アート・センター／慶應義塾大学附属研究所新道文庫